国立大学法人 大阪教育大学
大阪教育大学 附属特別支援学校
共同研究者　竹内 ゆりか・岩﨑 弘・森下 紘菜
湯浅 哲也（特別支援教育部門）

知的障害特別支援学校の音楽科の授業における Ontennaの活用に向けた考察

研究目的

本研究では、様々なニーズを必要とする知的特別支援学校における音楽科の授業での一斉指導の困難さを軽減するために、触覚刺激を用いたリズム提示が有用であるかの検討を行う。

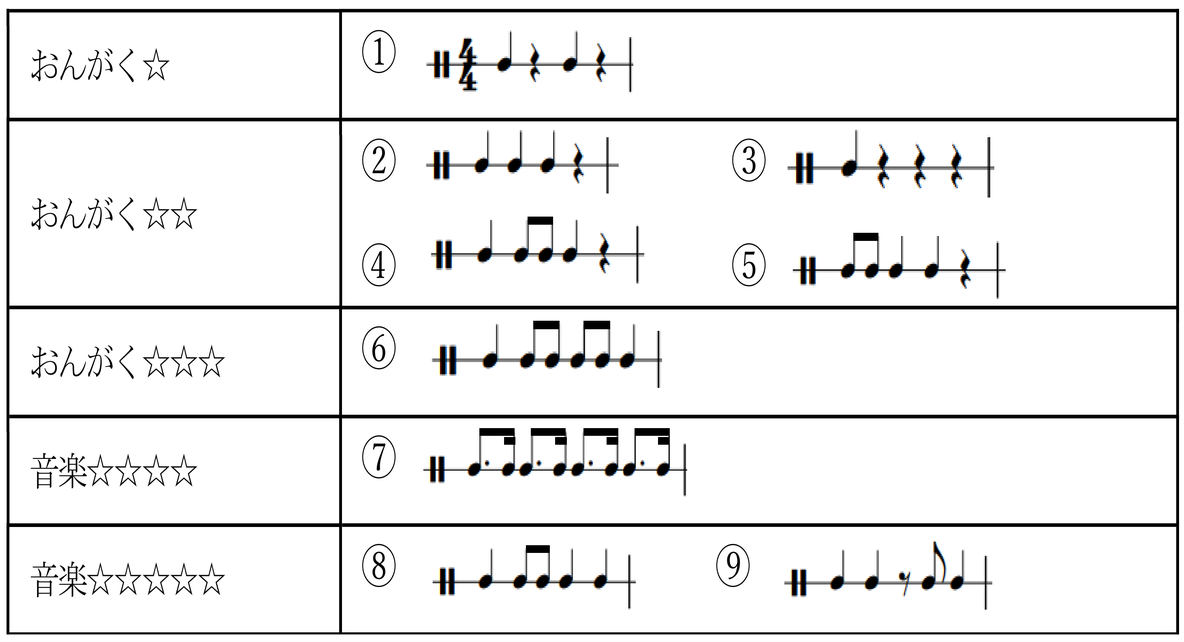
研究方法

対象生徒：令和５年度　中学部１年生６名、２年生６名、３年生５名　計17名
実験計画：対象生徒は第１回、第２回、それぞれに参加した。

	日時	実験内容
第１回	R5.9.8 R5.9.25	【オンテナなし条件】 聴覚刺激（手拍子）＋視覚刺激（手拍子の様子）を 提示後にリズム再現
第２回	R5.11.28 R5.11.29	【オンテナあり条件】 聴覚刺激（手拍子）＋視覚刺激（手拍子の様子）＋触覚刺激（オンテナ）を 提示後にリズム再現

手続き：「これから手拍子をします。手拍子を見てから同じようにまねをしてください。」
と教示を行い、リズム・パターンを順に提示した。提示は２回まで可能とした。

リズム・パターンは特別支援学校小学部知的障害者用音楽科教科書、特別支援学校中学部知的障害者用音楽科教科書より抜粋した。



結果と考察

１．リズム別の正答数及び正答率

正答数及び正答率が上がったもの	変化なし	正答数及び正答率が下がったもの
①③④⑥⑦⑧	②⑤	⑨

２．生徒別の正答数及び正答率と生徒の実態

正答数及び正答率が上がった生徒	変化なし	正答数及び正答率が下がった生徒
６名	５名	４名
S-M社会能力検査の全検査SAが比較的低い。多動や不注意傾向がある。		支援譜を自分で読み取り、自主練習ができる。身体機能への課題。

３．結果から得られた指導仮説
リズム指導への触覚刺激について、リズム指導の導入期は触覚を用いた指導を行い、習得が進むにつれて、触覚刺激をなくしての指導をするのがよいのではないだろうか。

４．今後の課題
①仮説の検証　②オンテナに適したリズム・パターンの検討　③リズム表現のための支援